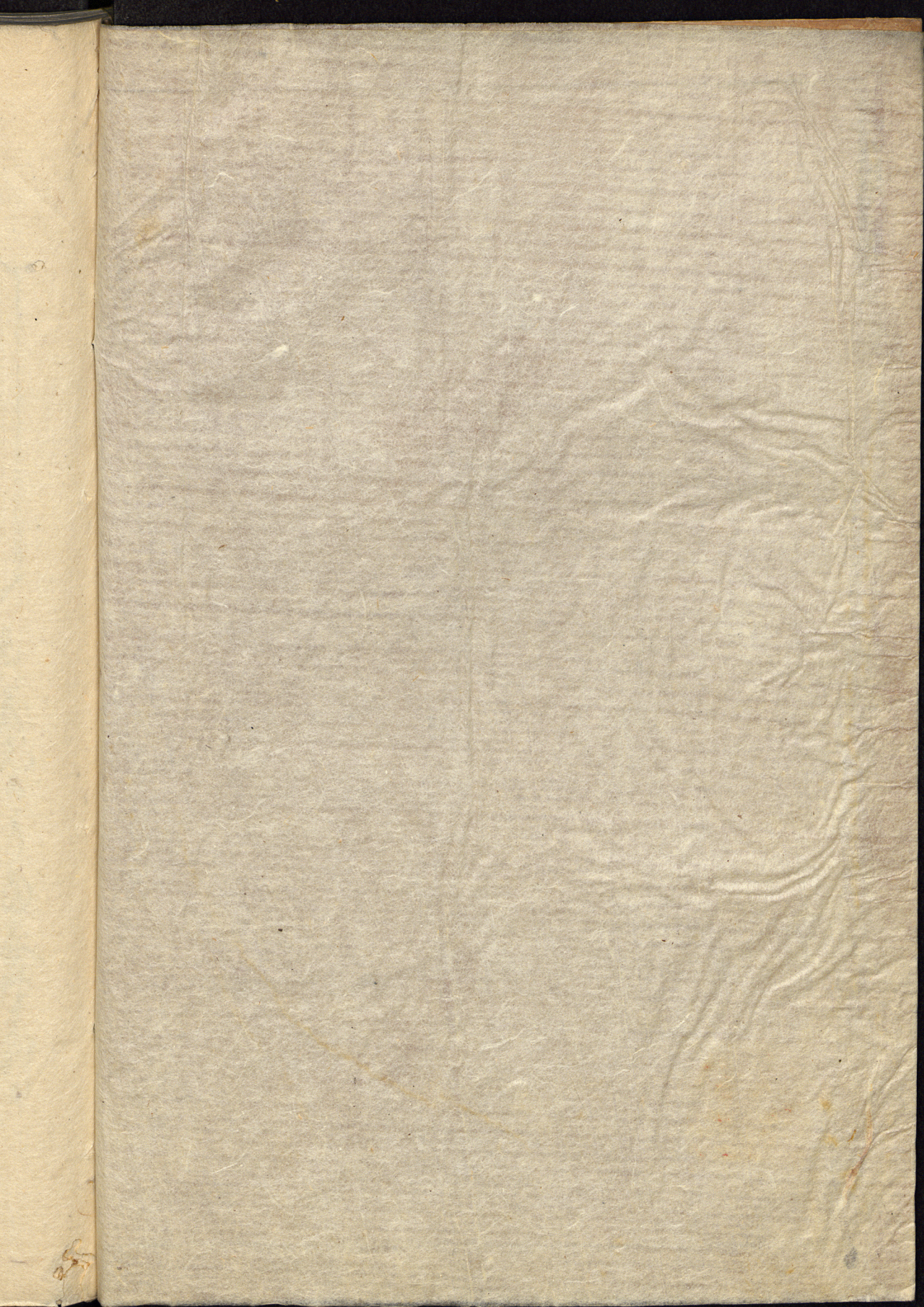


肴組
雜煮
三峯膳
饗膳
献立次
七五三



五段四

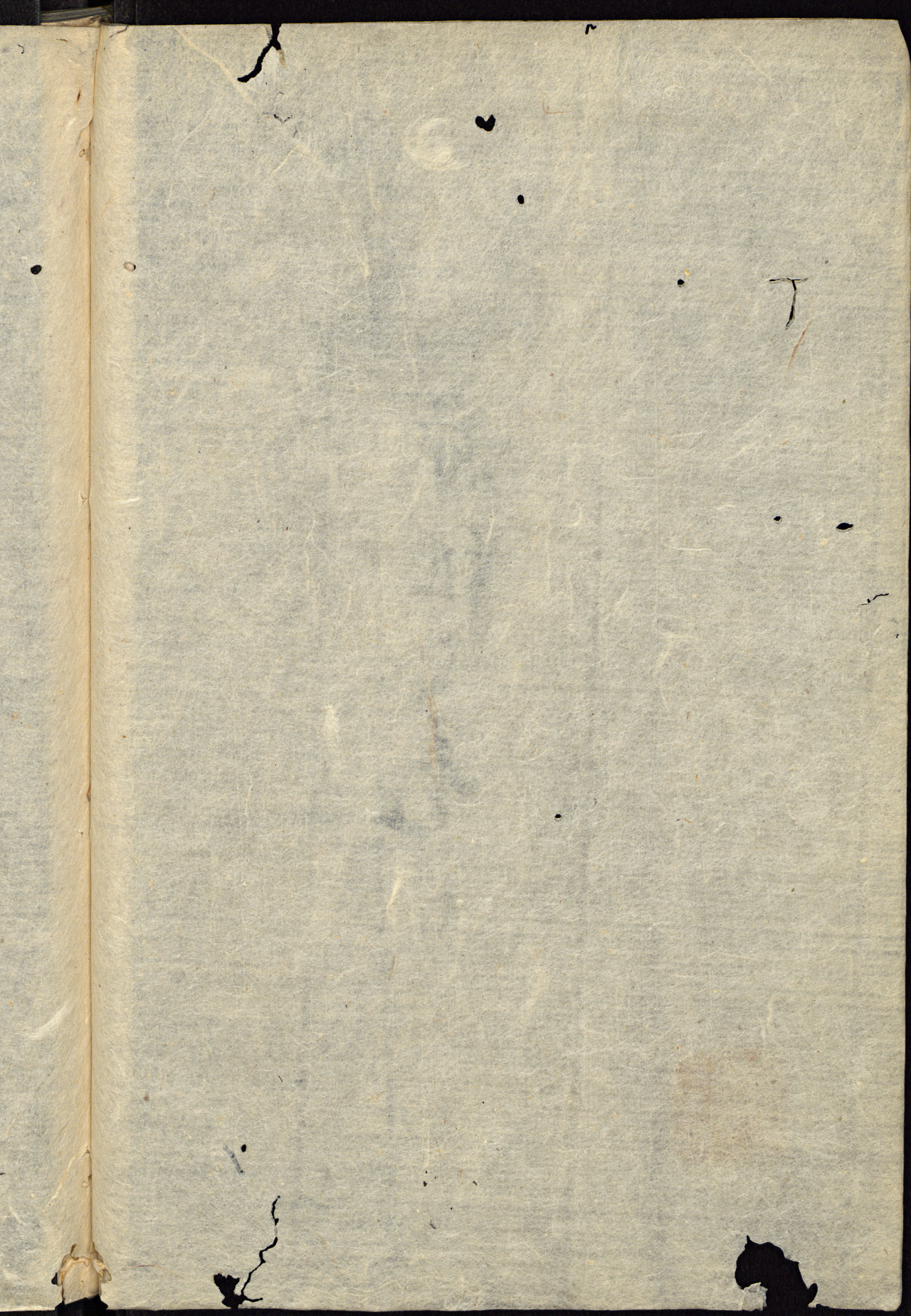




看組之毛

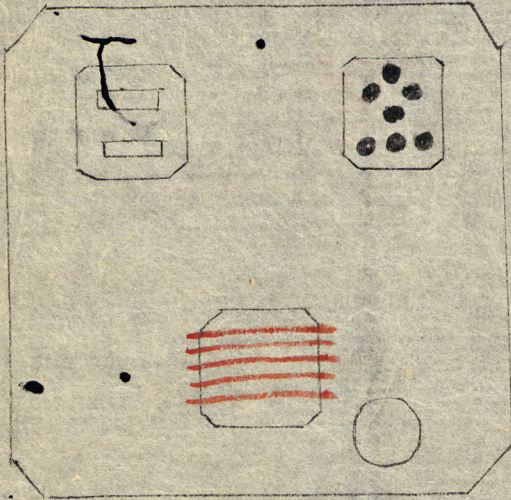
凡九



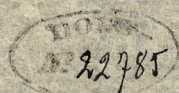


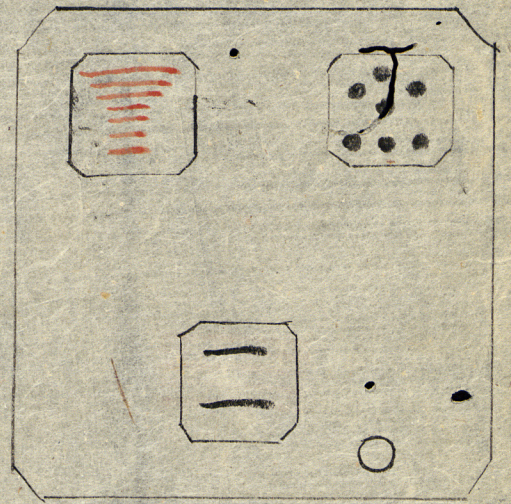
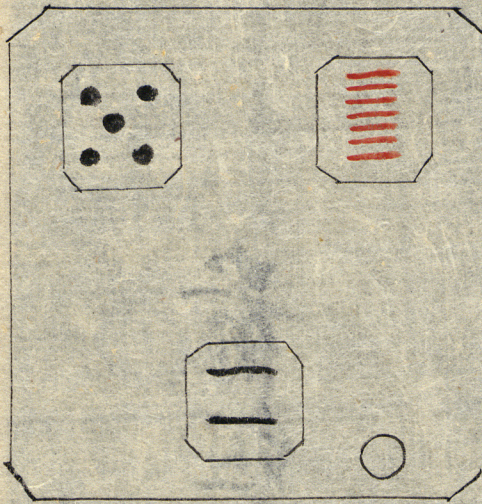


省組之巻



山崎の附とが古筆にて
組

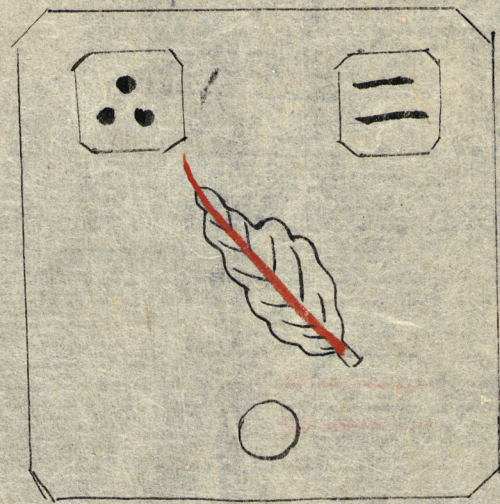
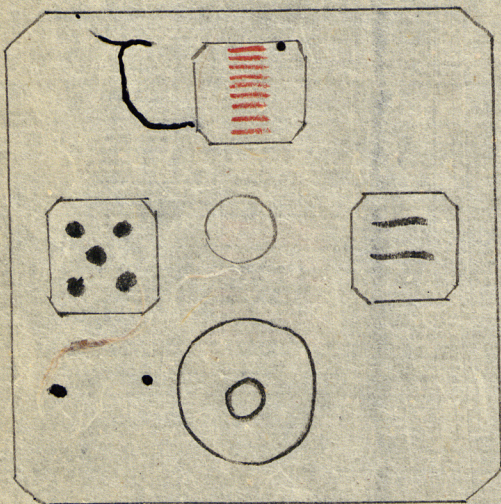




由陳の者能昆布一切
勝粟七〇廣中下奉之

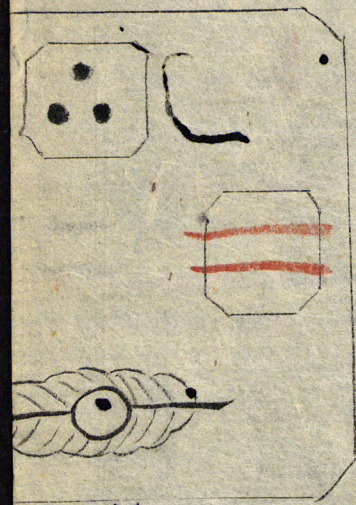
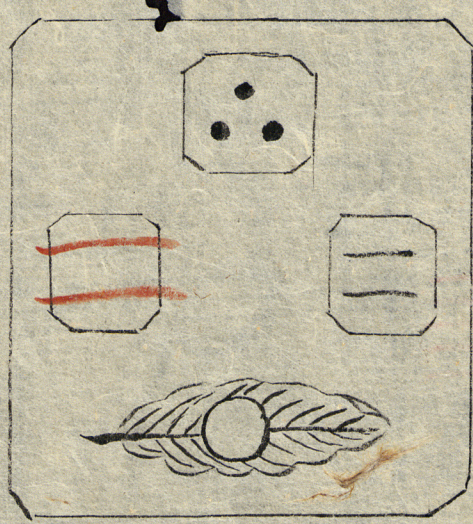
出陳の時より古事
此より終局

是義先云より尚家修来初

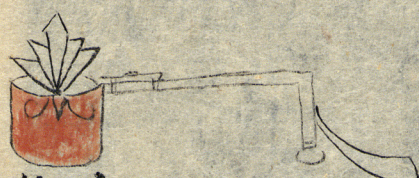


是ハ義光より商家傳來の
 爲の記也。陳の厨中より
 婦人よりとまてやとて、
 角よりとまて人よりと
 也。是布ふ切目とつ付
 されども、云々の腰裏
 かちりとも、やまて
 こゝを金一やりに
 わるひと能く

是ハ切目、或ハ、
 此より、同金一
 なる梅丁と云ふ
 の内、
 於て、
 中、
 金一



是ハ幡登母頭國中退治
 時御海流の口着也其者
 事ハある事清和天皇より
 御傳の御方より御子ラ
 大將と存る是常と云ふる
 瓶と云ふ方より一銭粟を
 食時ハ此軍小なりと云ふ
 矢蛇ヲ食時ハ此軍と云ふ
 今ハ此軍と云ふ
 我輩ハ此軍と云ふ

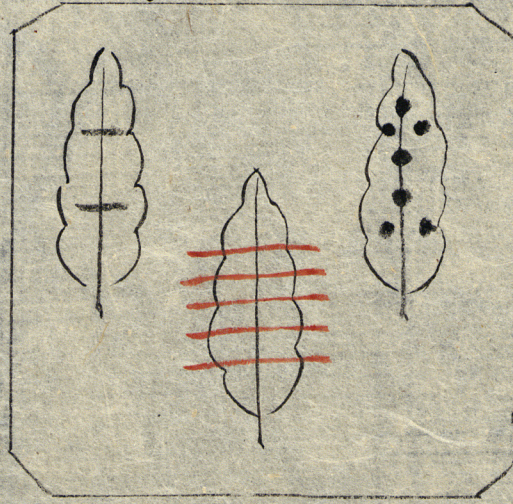


是ハ女衣簪幕はき下時
 諸神初請の香籠東西
 の押板曰香天摩利支天
 と書焼香同香三脂粉子
 一具洗子挽ひて女衣と
 脇にかけし一洗子と
 右小提乃小魚次母衣
 簪幕此布と扇提の奴
 小入て神衣とす

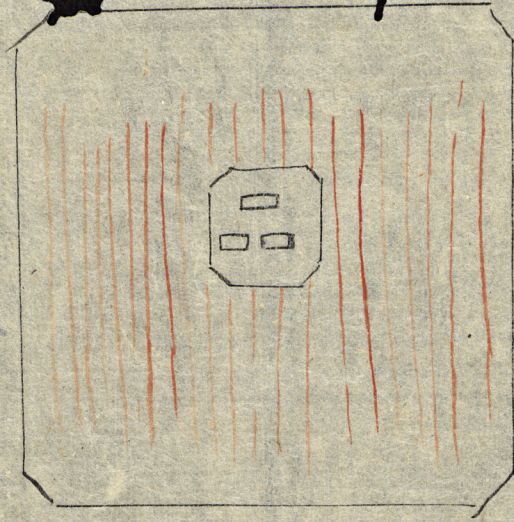
布の端と切て口を布の



襦袢此布と肩掛けのぬ
ふへて袂と前よりすむ



布の端と切て口を布の
と小至新紙をすし後
に利支天衣の者とははて
其まは二指又仕立人
一指すし袂の酒と挽小
へくすし毎よりほく
毎又襦袢はて裁き飲物
てまふはる裁きし
何と目あに裁きしとまふ
後だしと後列はきすて
各段そありしは襦袢
のこころめ時いこゑの襦
有りしとあり



切手

是の腰切手すのり青紙に
置かれよき物に切紙
酒と六切手小初めをせよ
二献の手までお待たせと献
一献のにて又切手より
又二献の手までお待たせと
すのり

沈子の糸ねいおめふたのきと添へて
右斗ころまねとせよと
最よりきつてありと

右一書名曰南家詩集詩乃
妙書概不涉依學書之勞
今校令平用而亦得他見
此書有回文也

雜志

四十七

一
卷
之
八

蘇
子
瞻

蘇
子
瞻

一 難然と云ふは鬼甲かぞ
よてあつともふはきふて有
角

一 日と海と集よりて終て
主と云ふはあつともふは

あつともふ

難然

とりへき

一 市此食の味大形けりる

菜が精進といへる大形味

け極や

二の膳の味も是と云ふ
どの菜もいへる味もあつ

何物も何の味も
是も味大形けりる

は

はつては

角角是付 ちけ

さーみ

ふけこ ちけ
く豆付

ちけ

ちけ

焼あな

魚け

えきま

子の子

魚け

あひ

川物日並何と云
おしきく

く豆付

魚くまり 焼おかし
といふ南豆付けあじ

いせ前垣著

魚あじ 魚あじ
くりあじ 南豆 洗

あじ

くけ 魚け
二

あじ

一

松浦めけり

一二いれけち秋めはあつた目
菜の地よりひく海菜ふりて
至下是も一遍ふりて
いづれとち列の有り

二あけち秋めはあつた目
此れとち列の有り

引物同之

口

あなま

あなま

あなま

ふりて

あなま

うさぎ

うさぎ
うさぎ

うさぎ
うさぎ

五

うさぎ
うさぎ

うさぎ
うさぎ

うさぎ
うさぎ

うさぎ
うさぎ

うさぎ
うさぎ

いふおは

いふおは

いふおは

一湯清れもあけ何れも貴殿の御薬
二目もけり在るひの汁諸
難をけりやも是れ成るの時
七月までとらぬ時の水も
相傳えぬ目法も目
下の方の目も目も
事ある二目も目も
さうさ中眼の目も
あうさうさ

二

二

魚汁

蛸汁

蛸汁

二

こしょう
くま汁

かき汁

とり
くま汁

右一連三首家傳東坡
為梅書既而涉流學焉
今授命平用新外懷德
此云有之同歸者是

三
山
峯
十
之
三

四
十
八

三

二 寒 胎 事

一 かんをば季と表うつしけふ雪なり但に季と二季
残して二季の如き山のありはるる雪をまよへ
季乃神とんかへ

一 表は況ふ山乃色青

表の末山の色黄や
冬に過ふ山れ色

此時ハ秋と推る

一 表ハ現在ゆきの色黄

秋の末山の色赤

表ハ過ふ山のいろ青

此時ハ冬ノ残照あり

一 秋ハ現在山の紅葉あり

冬ハ未来山の雪あり

夏ハ過去山の緑あり

此時ハ春ノ残照あり

一 冬ハ現在山の雪あり

春ハ未来山の緑あり

秋ハ現在山の紅葉あり

夏ハ過去山の緑あり

一 盛極人ノ前ニ寸草アリ

去右ノ角ニ能ク相対あり

一 吟詠を冷けりて足分りて水ニ流れて至る

合著と取入るを毎手にて一巻と一巻乃ち其の

一 喰極を冷汁にして見分かん一 喰は清て至見

合著と取しとあ手にく一 喰と一 喰乃目かまへ

相三のふと當季斗残て二季とあて喰也

從三季すは崩喰もふも能く人より時宜よ

ふふ

一 喰のまを喰は方中を二方トを是折に從時

宜よもあ一 事一

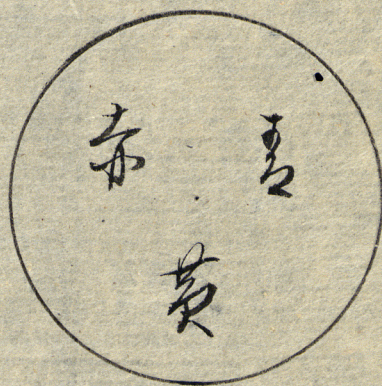
春



秋



夏



冬



小笠原大膳大夫

長時

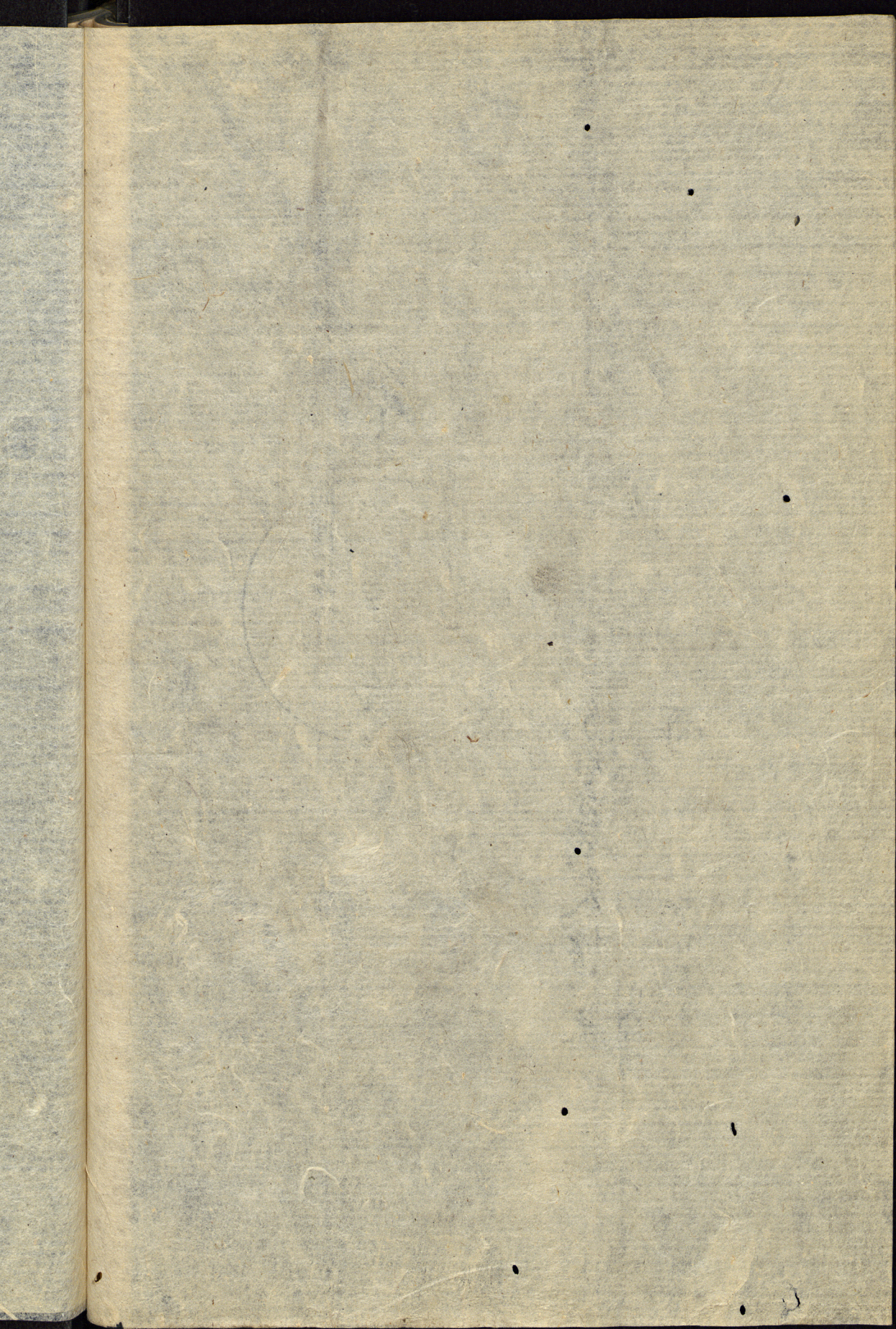
同

右衛門大夫

貞慶

小池昌久

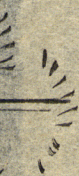
貞成



木よせん

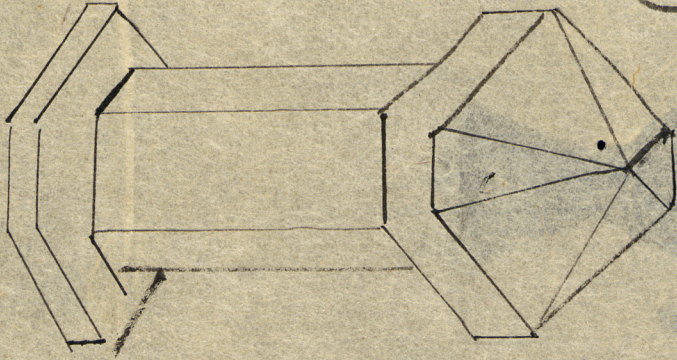
人

人

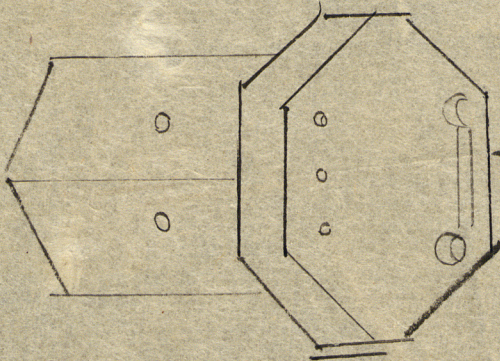


人

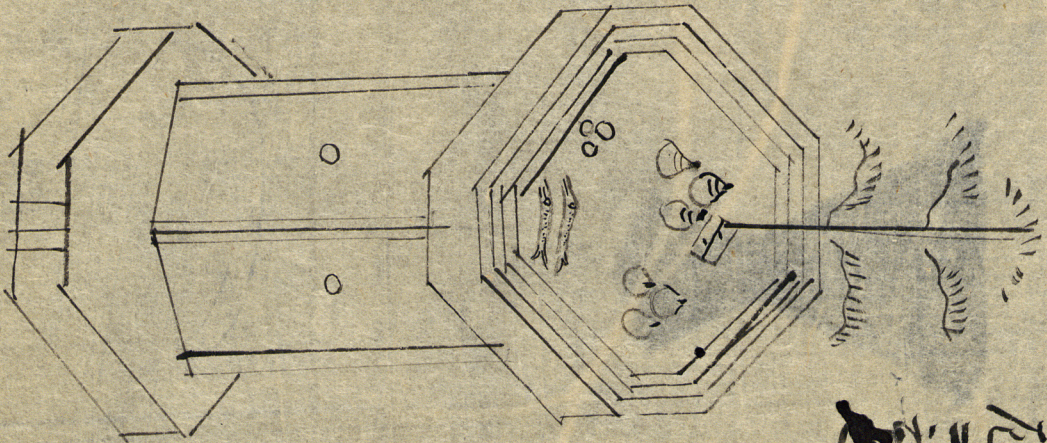
五ノ目



五ノ目



五ノ目



魚腹



女

五



魚腹

女

五

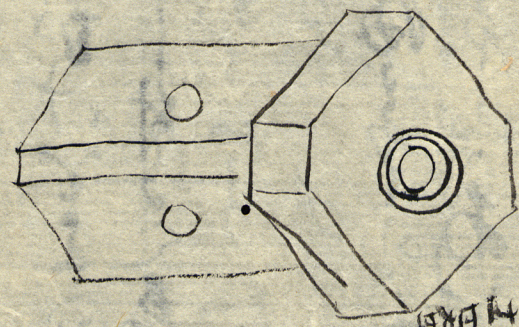


一二重のまけやう其の足三寸同やちのいふは
 かた折腰の廣さ二尺一寸と乃其の腰れをさす

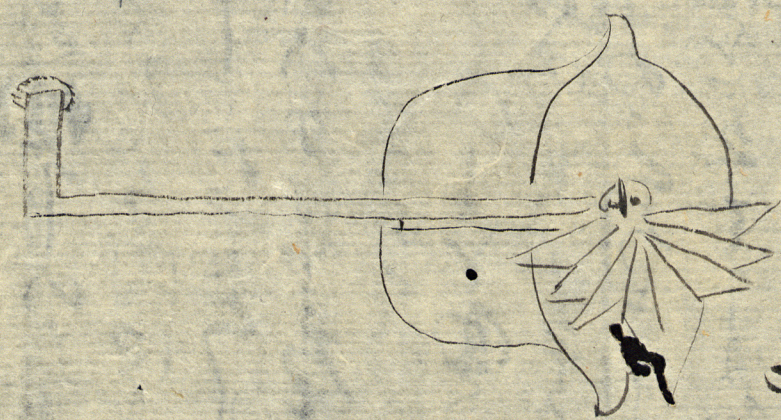
花の
 葉



花の
 葉



花の
 葉



花の
 葉

[illegible]

五松之金液甘露也

一 卿食乃膳常の玉卿之公家食と登箸乃と

うゝてとて平に製る汁中にうけりさきふ梅
干二ツ何れもものに舖と二ツ版と合せてめしうけし
方浅梅干のふくや何れも土器に石置板盤
等のや

置離置離も昔のちと守長一人三突す小
かよりて足と片ねと足三すやともより但子の
都のいふ寸知る者とも守へ

世之爲之者

石人王

中地
一
二

[illegible]

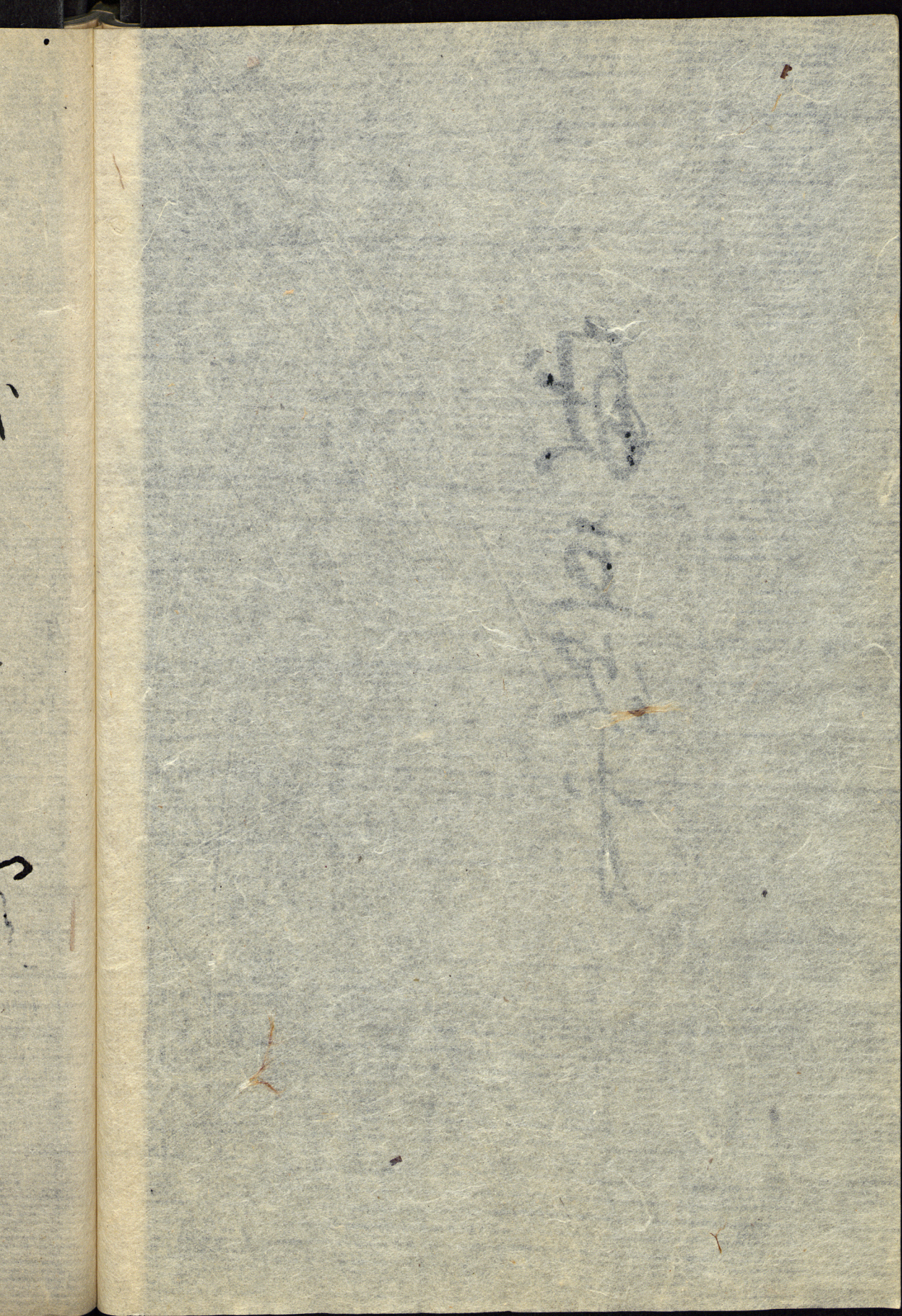
亥卯年十一月

文刊



狀立次

白雲山



秋立くは牙

御手懸云卿紙と皮



一式三秋は清水如池之印式は先二番より式

三秋より酒の冷酒とある人より外にある

しんじんとる沈子提提は沈も経國の



同



同

わうきそく

二



一 或手紙に三條を云卿之先一番は三盃
 もつりいし海をそと人より所産なりと生
 るいあ人すい海で諸説子出との盃よて三度
 けて言て相砂印もてうちとあ人の右
 方へも利海て赤砂指あて二日月の盃よて
 三度け言て又砂印もてしといとあ人

乃たれ方すし酒して砂指あて三ツ目
盃にてE夜即ち春より三ツ九夜のみぬ
酒相俣度はさし一ツ三ツ月其度はさし
一ツ無言時初夜も二ツ砂二度と加へ
めは三度とさし一ツ盃のめは三ツあつ同
ち居候

一 同たしあ人三ツさるまがりや相俣面
ふ出さして砂一組して其のこ

一 主人所をわし相俣るし一ツ相俣度と
す

一 陀子提と初公り時のしと暮
一 砂不結様と砂とよりしとあり

一 著物も如松馬丸三膳すし物割着

一 砂不結様と砂とよりよりなるこ

一 著何れも如後馬元三張より寸は物別著
取とつた右何れも糸と口は

初執

さきとさいのう

けつ相

著と

たのう

うとと土

新之吸物

美

二執

はるかに
おる

他國

おる

ひかり

著

た

ひかり

いり小湯漬よりせい湯漬のうらみかけ

いりぬき

一湯漬のひかりかけ

一引物かけ何れも経年

二の汁かけ

汁かけ

た

一 物わけ何もしも経書の

二の汁わいしるいふにわいし
汁二つあるもあつた

くほひき

くほひき

くほひき

くほひき

くほひき

くほひき

くほひき

くほひき

くほひき

たに

たに

たに

たに

たに

たに

たに

たに

塩

塩

塩

わ

わ

わ

わ

わ

わ

わ

五

川柳

おのろけけ

鳥
かうとけ

三

一葉子の山に花をさすか記いさる

一葉子のあゝは木村氏十二世

あゝ

事柳

ささる

あゝ

かゝる

ささる

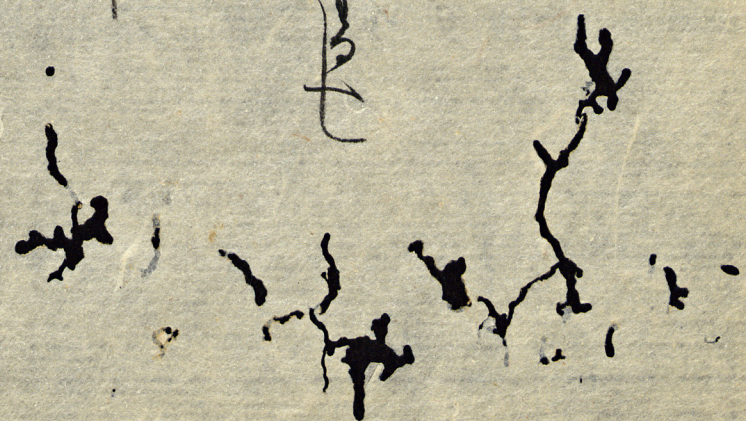
むすの花

ぬ

あゝ

えん

あゝ



口秋

右菓子

十二組

内入

活物橘焼

さくらんどのり

麦餅七角

からあげ

秋

秋

乃其のれきに
事あるを
口傳

ある
事

ある
事

ある
事

ある
事

ある
事

着

着

七秋

はらう著

山樺

あはれ

わが

う

一、人々を悦ばせんと欲するは三つの徳を有する事
て、徳ありては、財ありては、用は尽きぬことなり。

八秋

活物ありては

三つに
徳著

九秋

あひし
小角是

九秋

十秋

あひし角是

同

丁
小

深物あひ

卷之

十一

之

之

之

十二

之

Handwritten characters at the top left, possibly a title or section header.

Handwritten character at the top right.

Handwritten character at the top right edge.

Handwritten text within a rectangular frame on the left side.

Handwritten text within a rectangular frame in the center.

Handwritten text within a rectangular frame on the right side.

回

回

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十六秋

十七秋

18

江戸
角三付

如也
同

うすり
角三付

おすり
角三付

如也
同

うすり
角三付

十八

うらまは

ゆき

かひ

十九

きん

しん

たの

一さうにも常ふの

一回他付ふ

一さうにも常ふの龜乃ううねとありあつたは付た
てり

一回他付ふは魚さうさうして魚をけあてたと
うに經てのうとて

子

さうなうさ

さう

さうなうさ

一常食ふは才大にけふのうとてさうなうさ
もある魚大にねずみはねす

一引物お世何なり
さうなうさ
二膳あはれさうさ
さいねうさ
角足付

形は...

けし
くま汁

うまの汁

えんせう
くま汁

くすの
くま汁

うまの汁

えの
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

うまの汁
くま汁

一斗物同和の...

一、物同様の物も一層之
は不可定極端の物也

二

三、めい汁大形ぬはてぬれ二つめといふは、但まの
とて、ぬれぬれとて置る。これと一層之は、不可
定極端の物也

四、物同様の物も一層之は、不可定極端の物也

岩岸
おとし汁
ぬれ汁
ぬれ汁

并ぶ

ぬれ

ぬれ

ぬれ

ぬれ汁
ぬれ汁
ぬれ汁

ぬれ汁

ぬれ汁
ぬれ汁
ぬれ汁

一

川まひ

山ろ

ふらふ

目

しあもも園

わもせり着

あやめ

わもせり

あやめ

あやめ

しらあひ

あやめ

あやめ

あやめ

一 滝式より凡そ縁之身いふちきりもあひもその御前
足とあひあひと相俣なる足と付らりて

一 陽清うけいふちきりもあひもその御前
あひあひの汁ぬるあひあひの汁ぬるあひあひの汁ぬる

あひあひの汁ぬるあひあひの汁ぬるあひあひの汁ぬる

...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...

...七ツ...
...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...
...の汁...

二

奥の汁

たこ

おの汁

三

いん

かめ

唐汁

ろ

わさび

中野原古橋本

長所

日

通家

中池

り

り

り

てみ三えと

四十一

七五三

初献

よ

鳥の

Handwritten text, possibly a signature or name, oriented vertically.

Handwritten text, possibly a date or number, oriented vertically.

七五三飾

よ

初献

ささ

鳥

新巻

亀の甲

二献

操耐斗

調
魚
粉

法
庫

三献

楊

湯

蛸

ひき

一湯漬

けり湯漬まのりゆりをはなれ肉また
つとむいぬ物と

大形めさ

テ汁の母之菜いみあつ
け二ツめは何もめい

いさめ河をせ
終りや

蛸

小角足付 鯛汁

是付

小角豆付

二五

んし
わく
角豆

急心
小角豆
かす
大黒
煎汁

あやかし
さうじょう
かき

わき
あし
り
著

蒲海

足付

かたき
くま

小角是付

二比
小角五付

ひり
小角豆付

五

引物同前也

二所
小角豆付

うさめ
ひ汁

鳥
小角豆付

三

右何も堅物古墨也中湯漬りめ汁極之

一菓子汁中身大形の廿十二粒也

きり

く枝

きり

く粒

きり

かき花

山花

こふふ

上



山乃ハ

之

一 式がハレヒミツ
一 式がハレヒミツ

一 女式がハレハヒ
ハテハ人ハハヒ
ハヒハヒハヒハヒ
ハヒハヒハヒハヒ

2
天

5

3

に献

添物より花也

素

新装

ひき

他長き小角北星のりき
まゐりて居

五鉄

をぢん 魚

もあ
まじ
吸物

ひ

六鉄

六秋

添物まうはド

但小まゝ奥を串かき
かまるといふや

饅頭



三
は
う
せん

法
物
ま
う
つ
と

八
献

丁
旭
秋

まじ
志ひ
小角豆付

歌

ま
月

十
秋

あ
あ
い

添物あゝい

屋うかぎ

下
一
献

あまのこ

さくら

さくら

十二鉢

添物ぬきみ

漢書の

五ノ如

十三転

七
九ノ

下
あきなり

うひて

十日

あきなり
うけ

鯨

うひて
日

十日

十八日

夕陽
夕陽

夕陽

夕陽
日

十六日

夕陽
夕陽

十八

たぬき
の

せい

かき
の

十七

かき
の

かき

一
難
を
あ
ら
し
め
る
の
甲
に
あ
ら
し
め
る
な

ぬ
と

たいの
子
月
と
る

一 難者を少くし一 龜の甲ありてその

一 同くはちし一 龜の甲ありて其の
了也く物もあはれ

ふさし一 龜の

難者

とあり

一常の食乃は力大形に作る

菜の精進も作り大形に作る

二の佐菜の作り

は遠く菜の作り

引物の作りありともまて
種大形の作り

は

は
くま汁

魚汁

は
くま汁

明

角豆汁

ひき汁

うみ魚汁

かま汁

くま汁

魚汁

魚

くま汁
小角豆汁

魚

焼物汁
汁

は
くま汁

卷之四

菜の組あといひてなかりとて佳

足も一浦から立つ魚とせいのゆゑ
ふりうゑ

二のけち形め其の魚は日暮
いしとふふりうゑ

川内魚

に

えき 角

あいつ

くらげ

あつたけ あつたけ

あつたけ

あつたけ

ふりうゑ

ふりうゑ

かき かき

かき

かき

くらげ

くらげ 角

くらげ

あつたけ

わいせり

わいせり

わいせり

わいせり

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

いあき

一湯漬のともめけにも貴族は御前へ

三月とけ二ツ在之也らむのけ緒輕の

けりや早湯成るもの時をせしめて
まじりておのれやいふ時を相はな
其月弦の三日月とて常のちかき
まじりて一帯ありて三日月とて
月一帯の時も布弦は同く三日月
大形ゆへにちかき

魚のけ

蛸のけ

あつめけ

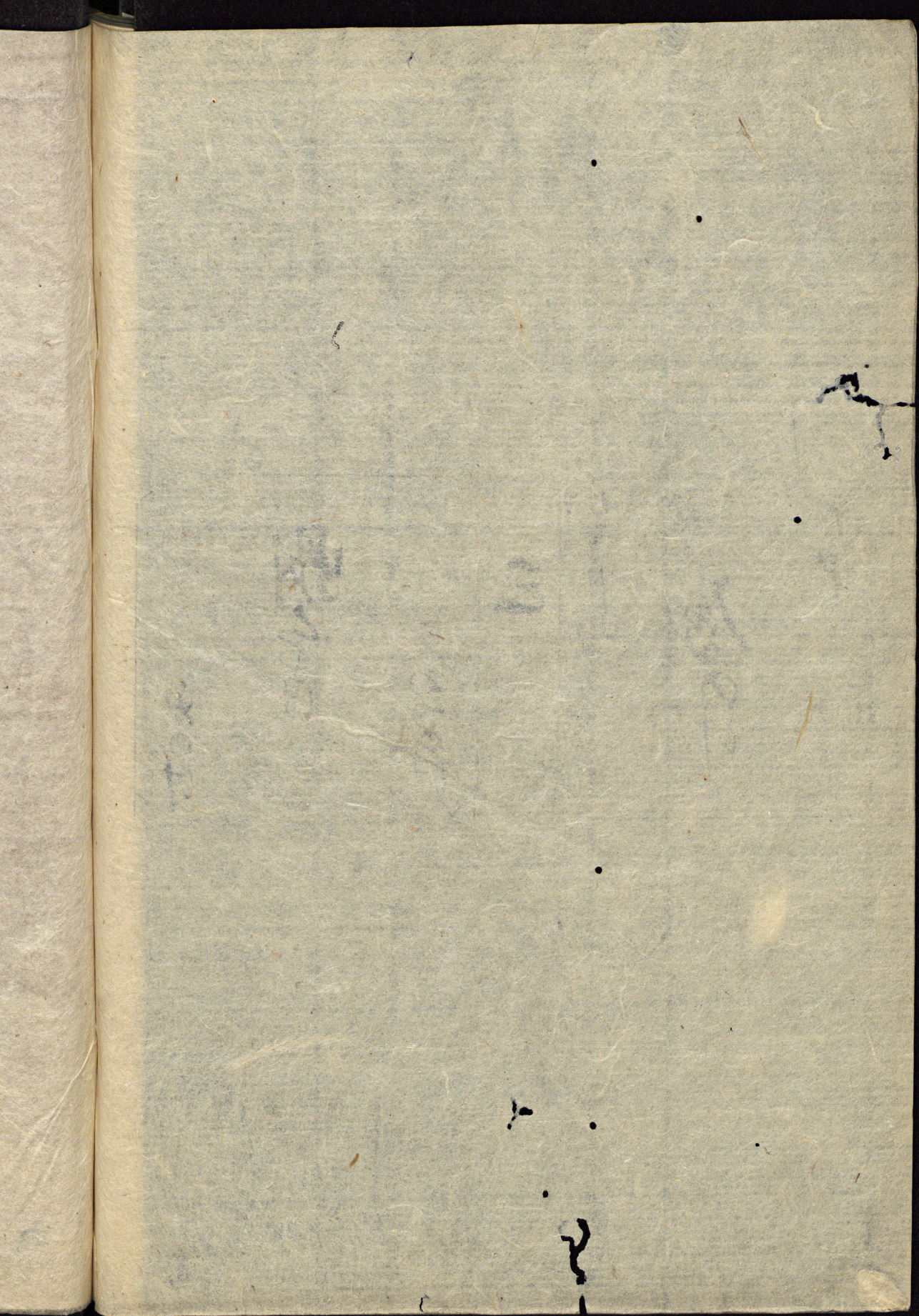
三

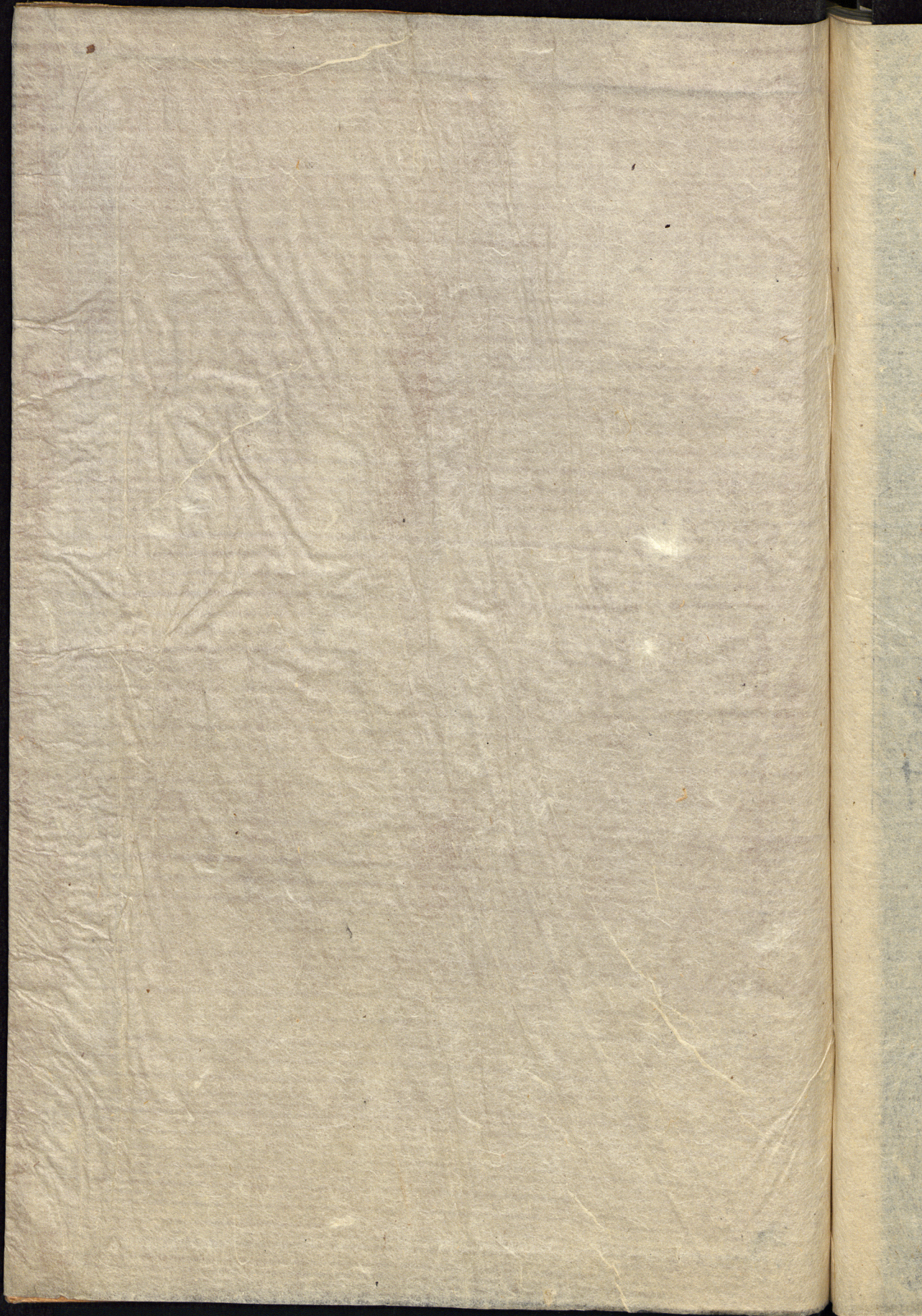
こさし
うまけ

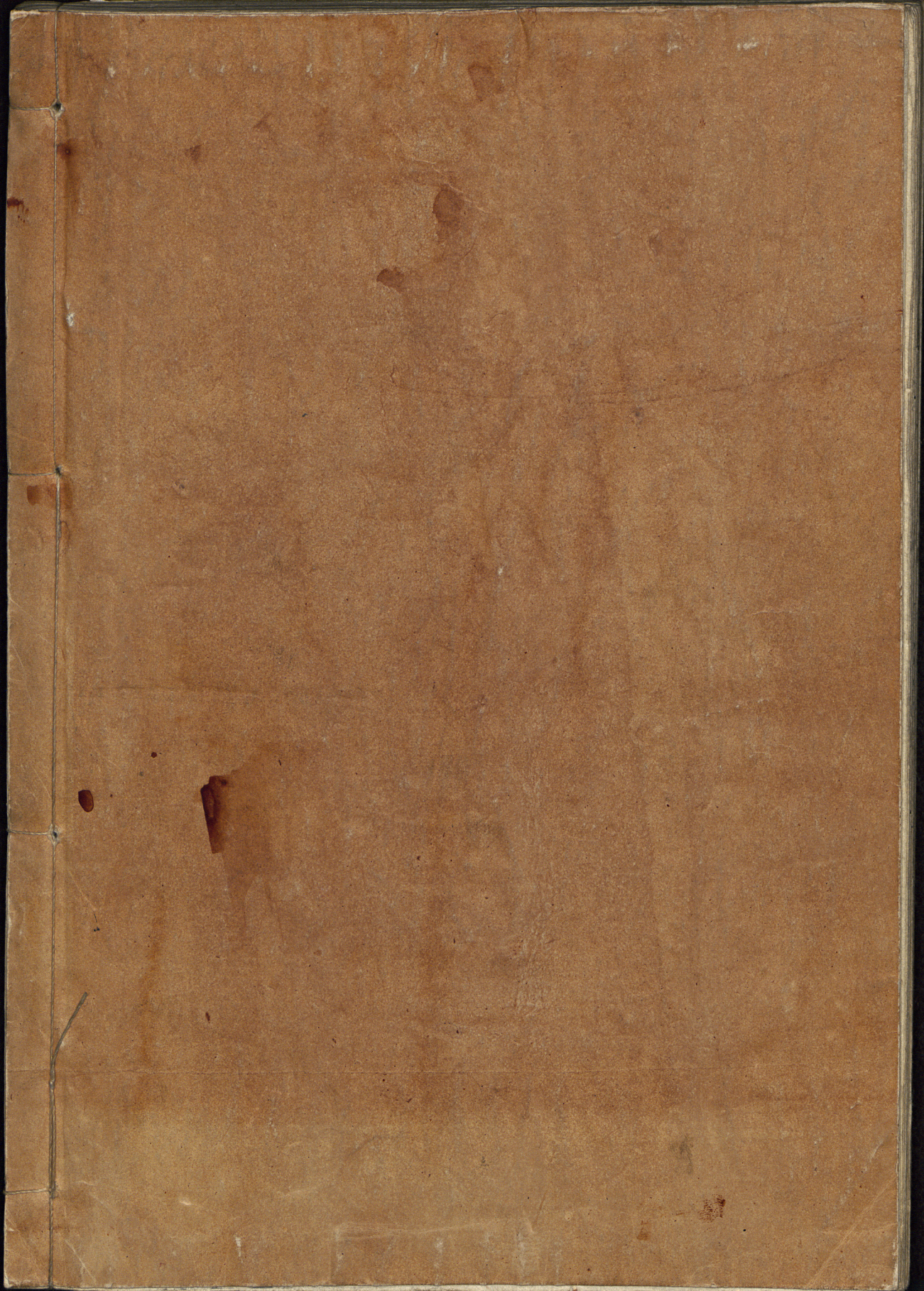
ぬき
かきめ
けのけ

とろ
うまけ











H+K 2

GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart

15.01.2002